「オイ伊八どん、又手が鳴つてるで」
「叶はんな、寢かけると二階から呼びよる、こら夜通し寢さゝんな……ヘエお呼び」
「伊八、敷居越では話がならん、ズツと此處へ參れ……ズツと參れと申すに」
「ヘイ」
「當家へ泊つた節に其の方に」
「アヽ氣兼なナ、何遍も〳〵、金一歩頂戴致しました、夜前は泉州岸和田岡部美濃守の御領分、浪花屋と申す間狹なる宿へお泊りになりまして、有象無象も一緒に寢かしまして、順禮が詠歌を唱へますやら、六部が念佛を上げますやら、相撲取りが齒切を咬みますやら、驅落者が夜通しイチヤ〳〵申しまして一目も寢かしへません、今宵はどの樣な部屋でもよいから靜なる部屋へ泊めてくれとおつしやひましたに違ひ御座りません」
「コリヤ〳〵伊八、其の方が申すと拙者の云ふ事が無いではないか、左に在らず、其の方へ泊つた節拙者紀州和歌山の藩にして萬事世話九郎と申す者ぢやと申したが、これは眞赤な僞りぢや」
「ヘーエ」
「誠は高槻の藩にして、小柳彦九郎と申す者ぢや」
「ヘイ成程」

「國元に於て妻を討ち、弟を討ち、金子三百兩取つて立退し曲者があるぢやて、殿に仇討をお願ひ申せしが、目下の者の仇討故お許しが無い、そこで永のお暇を頂き諸々方々と巡り探す折柄、今日住吉四社の明神へ參詣を致したと思ふておくりやれ」
「仲々御信心な事で」
「その神の德によつて仇に出逢ふたのぢや」
「それは又お目出度い事で、何方でお出逢ひになりました」
「出逢つた場所か、出逢つた場所はその方の宅ぢや」
「ヘエー、手前の宅とおつしやると」
「ウム、隣に泊り居る三人、喜六、清八、源兵衞と申す其の中の源兵衞と申す者、問ふに語らず語るに落るとか、蛙は口からとやら自分の口より白狀致した、先方より名乘つて來るか、拙者より參らうか、返答を聞いて參れ」
「フアイー、甚い事になつて來たで……ヘイ御免を」
「オヽ伊八とんか此方へ這入つて、源さん艶事師やで、人を二人殺して金三百兩取つて未だに知れんて」
「それが高槻の小柳彦九郎はんで」